

V テクノロジーと〈新しい女〉

一 複製技術時代のアートにおける作家性とジェンダー

香川 檀

文学のジャンルで「書くことの大衆化」が起きたのと同様に、美術の世界でも、従来の表現メディアである絵や彫刻に代わって、カメラという機械の出現が「ヴィジュアル・イメージ生産の大衆化」をもたらした。本報告では、写真およびフォトモンタージュと女性表現者の関わりを考察する。

1 女性とカメラ

小型カメラが普及した 1920 年代には、女性のあいだでもカメラ人口が飛躍的に増えた。女性のアマチュア・カメラファンを対象として新聞・雑誌が各地で写真展を催し、写真教室が盛んに開かれるようになる。またプロをめざしてスタジオを構えたり、フリー・カメラマンとして出版界で活躍する女性も目立ってきた。写真というジャンルは、絵や彫刻のような従来の美術に比べて歴史が浅いため、伝統文化の負荷がさほ



どかかっておらず、制度や権威から比較的自由だったので、女性が参入しやすい部門だったことは確かである。

とはいえ、旧来の美術が「作家の精神を表現したもの」と見なされるのに比べ、写真は「機械による対象のコピー」にすぎないとして、芸術的評価は低いものだった。しかもカメラという装置は、対象を機械的かつ忠実に模倣するものである反面、撮影者の意図をすりぬける機械特有の視覚性（いってみれば「機械の眼」）をもってい

る。レンズの倍率差による奥行きや拡がりの違い、輪郭のブレやぼやけ、シャッターをきる瞬間に思いがけず写し込まれる偶然の要素。それらは、写真家の意図を逃れるものである。それどころか、写真には意識の底に沈殿していた何かを活性化させるものさえある、と見た批評家ヴァルター・ペンヤミンは、この知覚経験が暗示するものを「視覚的な無意識」と呼んでいる。

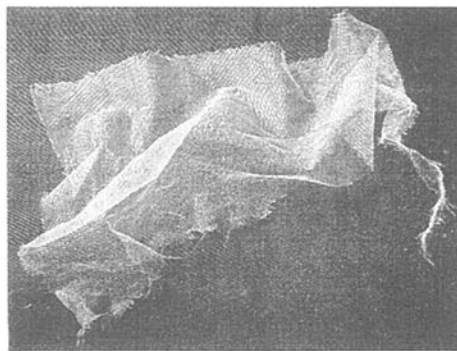
メディア美学によって主張されるこのいわゆる「主体の脱中心化」の命題は、行為主体としての作家という観念を解体するものであり、ジェンダー論の視点に立って女性の作品を作家性という観点から解釈するときに、ひとつの障碍となる。これを全面的に受け入れてしまうと、女性たちについても作者という観念を放棄せざるをえなくなってしまうからだ。ことにワイマール・ドイツのように、まだ男性中心の文化価値が根強く残り、個人を掻き消してしまう大衆社会の集団性や機械性を女性的なもののみならず時代には、前述のような機械観はとくに問題をはらんでいる。(たとえばクラカウアーの『大衆の装飾』は、ラインダンサーの機械的な動き、内面の空虚さを女性に重ねあわせているし、フリッツ・ラングの映画『メトロポリス』はロボットのマリアを登場させ、女性を邪悪で危険な機械として表象している。) ワイマール時代にはこのように女性を機械とその無意識に近い存在とする文化イデオロギーが潜在していたのであり、だからこそそのもとで写真や映画といったニュー・メディア・アート、すなわち複製技術時代の芸術に携わった女性作家たちをとりあげ、その表現の主体性、作家性を読み取る作業はいつそう重要とな

ってくるのである。

2 リングル+ピット

「リングル+ピット」は、1920年代の終わりから30年代の始めにかけて、これを商標に掲げてベルリンでスタジオを営んだ若い女性写真家のコンビで、本名をグレーテ・シュテルンとエレン・アウアーバッハという。代理店を通して広告写真を手がけていた。

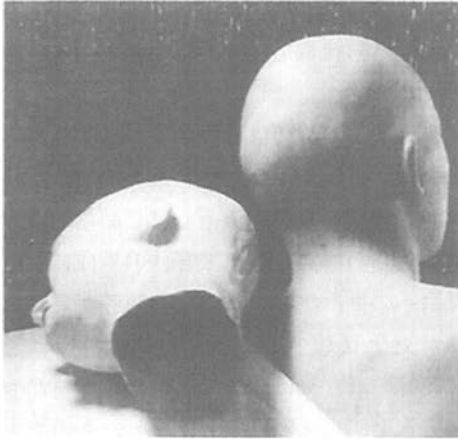
当時の写真界では、カメラが捉えた外界の美しさや事物の外観だけを愛でる物神崇拝的な写真が流行しはじめていたが、彼女たちの写真には、被写体の構成による社会への批評性というものの萌芽が見られる。たとえばアウアーバッハの撮った《花嫁の断片》は、布のはぎれを素材がもつ光沢と肌理を際立たせて写したもので、それを花嫁のヴェールに見立てている。糸のほつれたシンプルな布切れを、結婚とい



う女性の人生のクライマックスに結びつけ、華やかに正装した花嫁姿の断片とするこの提喻には、ユーモアが感じられ、妻や主婦といった伝統的な女性役割に対する作者アウアーバッハの心理的な距離を見てとることもできる。

また、シュテルンの撮った《頭部》では、

本物の人間（男性）の頭部が後ろ向きに、もうひとつは中空の石膏像（女性マネキン人形）の頭部が仰向けに並べられている。それぞれ剥き出しの頭部のユーモラスな類似性が強調されており、そこに「男と女」のテーマも挿入されている。人間と人形をこのように並置したり、そ

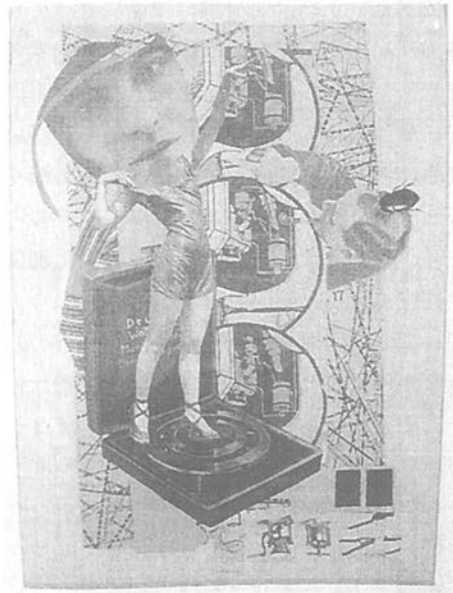


れぞれの身体の断片を組み合わせたたりするのは、からだモノのように感じられたり扱われたりする時代の身体観の寓意であり、美術の世界で言えばダダからシュルレアリスム、さらにダダ以後の新月物主義絵画に散見される「身体の物象化」の表現にほかならない。シュテルンはあきらかに、こうしたテーマ性を意識しながら被写体を構成しているのである。

3 ハンナ・ヘーヒ

このように対象の人為的な構成は、写真の複製機能をこえて、その表現性を大きくひろげる。その意味では、写真の断片や活字を組み合わせるフォトモンタージュは、たんなる写真以上に明確なメッセージ性をこめることができる。前衛芸術運動ダダが考案した技法である「モンタージュ」とは、

もともと工場での「組み立て」という意味の産業用語で、テクノロジーの世界から生まれた言葉であり、ダダイストたちはこの技法を用いて混乱した社会・政治をアイロニカルに諷刺した。とはいえ、言葉には還元できないイメージの組み合わせであるかぎり、個々の断片が画面のなかでもつ意味や図像どうしとの関係は、確定することができない。そこには作り手の作意がおよばぬ図像表現の曖昧さ、意味生成の深い溝があり、写真とはまた別の意味で、フォトモンタージュは作者の意図をすりぬけていくの



である。

ベルリン・ダダに加わってフォトモンタージュを多く手がけたハンナ・ヘーヒの作品《無題》は、女性とテクノロジーをテーマにした顕著な例である。画面中央の水着の女性の左脚は、箱に収められたボールペアリングの上であり、くるくる回る運動性が示されている。その傍らには自動車エンジンの図解したものと、それを覗きこむ男

性の頭部がモンタージュされている。余白の部分にみえる直線や曲線のパターンは、ヘーヒがイラストレーターとして勤めていたウルシュタイン社の雑誌『淑女』(Die Dame)の付録についていた婦人服の型紙である。解読の難しい製図用の記号や線が複雑に入り組んでおり、流行を追うために女性たちが味わねばならなかったストレスが巧みに表現されている。画面の下には、磨り潰すドリル式の調理器具が上下さかさまに貼ってあり、女性をとりまく日常世界におけるテクノロジーの氾濫が強調されているのである。

以上に見たように、写真やフォトモンタージュというテクノロジーで充填された「機械芸術」は、たしかに従来の作者という観念を無効にする方向に芸術を導きはしたけれども、女性たちはそこから新たに作家性というものを引き出している。すなわち、こうした機械的なイメージ構成法によって、社会と「新しい女」、テクノロジーと身体といったテーマについての批評的な作品づくりをしているのである。

【参考文献】

- Benjamin, Walter: *Kleine Geschichte der Photographie*, Gesammelte Schriften Bd. II (1), 1977
- Bojuna, Heike/Leipold, Ilona: *Die Lust am Experiment - Fotografinnen in den zwanziger Jahren*, in P. Bock/K. Koblitz (Hrsg.), *Neue Frauen zwischen den Zeiten*, Edition Hentrich, 1995
- Ellen Auerbach: *Berlin - Tel Aviv - London - New York*, Munich/New York, Prestel, 1998
- Fotografieren hieß Teilnehmen: Fotografinnen in der Weimarer Republik*, Katalog, Museum Folkwang, Essen, 1994
- Hannah Höch 1889-1978 : Ihr Werk, Ihr Leben, Ihre Freunde*, Katalog, Berlinische Galerie/Argon, 1989
- Lavin, Maud, *Cut with the Kitchen Knife: the Weimar Photomontages of Hannah Höch*, Yale University Press, 1993
- Lungstrum, Janet: >Metropolis< and the Technosexual Woman of German Modernity, in Katarina von Ankum (ed.), *Woman in the Metropolis: Gender and Modernity in Weimar Culture*, University of California Press, 1997, pp. 128-144
- Makela, Maria: *The Misogynist Machine: Images of Technology in the Work of Hannah Höch*, in *Woman in the Metropolis*, pp. 106-127
- ringl+pit: Grete Stern/ Ellen Auerbach*, Katalog, Museum Folkwang, 1993
- Rosenblum, Naomi: *A History of Women Photographers*, Abbeville Press, 1994
- The Photomontages of Hannah Höch*, catalogue, Walker Art Center, Minneapolis, 1996